

子どもにピンチ(020616)

子どもの様子を見ていると、毎日が楽しい事ばかりではない。友達とのつきあい、難しい勉強等。それでも、日頃は、何もなかったように笑顔を振りまき、元気な行動をする。

そんな子どもであるが、時々、大人をどきっとさせるようなことを平気で言う。日常会話で言えば、例えば、「先生が嫌い」「勉強がわからない」「友達に意地悪をされる」、時には、「学校へ行きたくない」等。などであろう。そして、そのようなことを言うときは、決まって、ゆつくりと子ども時間をかけるゆとりがない時が多い。先生、勉強、友達、学校などは子どもの生活の一部なので、好きとか嫌いとかの問題ではないが、あえて、それを話題にするのは、どうすれば、大人が自分を振り返ってくれるかという気持ちがあるのかもしれない。つまり、自分のピンチを伝えたい方法の一つとして捉えていると考えるとわかりやすい。

だから、その言葉の奥に、何かあると思って受け止めたいが、ゆとりがないと、その言葉の重さや大きさに気付かず、軽く受け止めてしまう。ピンチを伝える言葉を持たない子は、断片的に様々な状況を伝える。ピンチに対する対応にはいくつかの方法がある。

一つ目は、一大事と捉えて慌てること。何なの、どうして、と矢継ぎ早に聞き出し、大人が納得するストーリーを作りあげする方法。子ども以上に大人が不安になり感情が表に出してしまうこと。

これは多くの場合、子どもにとってよい結果になることは少ない。なぜなら、本当に知ってほしいことは、言葉で伝えたことの他ににあるからである。

二つ目は、いろいろと説明をして言い聞かせる方法である。これは、慌てて、どうしようと悩むよりも子ども心に近づく効果はある。が、聞かせる話は、落ち着いた雰囲気でないとい心に届かない場合が多い。つまり、タイミングの難しさである。

三つめ目は、話を聞き出すこと。しかし、普段から、自分のことを話せる子は、その都度、問題を解決しているので、急に大人を驚かせるようなことはない。ピンチを伝える多くの子の場合、自分を十分に表現する力がない。だから、「行きたくない」「わからない」と言っている。そうだとすれば、複雑な自分の気持ちを語ることはかなり難しいので、時間と手間が必要になる。自分から話をする子にするために、聞き役に徹底するなど、心を開くための時間が必要である。

四つ目は、やる気や意欲を持たせる知恵である。これは、日頃の子どもの様子をしっかりと捉えている事が前提になる。慌てないで、この時、どうするかと判断できる大人としての力である。